

陽のいろのやはらけき朝山竝みの低きに霞棚引くが見ゆ

向ふ山樽水ダムのあたりより空よりも青き霞たなびく

西側の丘下にして白壁にあたる朝陽のいろの和み来

白壁にあたる朝日の陽のいろのやはらかにして春の兆しす

三月となりて八つ手の實の残る茎切りてみつさびしくもあるか

三月の半ばとなりて八つ手花實の熟るるなる朝を茎切る

盛んなる水蒸気白く上がりみて朝のプールの陽のぬくもりよ

上がりたる蒸気漂ひ霧となる朝の校庭のプールの面は

若緑なる雑草の葉の先に露の白けき朝となりみつ

栗の毬生るる

丘谿の栗のはな終はり小さな毬の生れるつ枯れ穂の許に

木の下に色変りして花穂落ちはや生るるなる嬰子毬は

汗流れ吾が駆けくれば蟬の声観音塚古墳梅雨明けならむ

七月二十四日

誰よりも妻は喜ぶ吾が左眼腫る気なれど見えて来たれば

無花果の青き實の成る八月の蒸し暑き道に這入り来れる

草いきれする川縁の道曲がり橋のうへに吹く八月の風

濱松の遙けくも見ゆ公園に吹き渡りくる八月の風

校庭のプールの柵に沿ひて並ぶひまわりの花高き二本

校庭のプールの柵の金網を通して見ゆるひまわりの花

校庭のプールの柵のひまわりの花咲き並ぶ誰が兒か植ゑむ

丘谿の栗の許より昇り来しひとつ蜻蛉は踰えゆきにけり

庭柿 十月十六日

庭柿の青きが隠れ成りたるを帰れるわれの幾つと数ふ

十余り七八つ成れる柿の木と繁り葉のみの隣り柿の木

濁河の面の引き潮止り翹濡らし顛ふ蜻蛉の飛び立てなくに

校庭の砂地堰止む丸太木に初霜なれや白き輝き

椋鳥のひとつが歩道の前をゆく何の思ひと吾が言はめやも

雪融けし谿の畑地に陽の射せば赤土のいろわれに新し

見下ろすや西谿台地雪消えて埴土のうへの朝のひかりよ

朝陽射す西谿台地木立影埴土のうへに映りてあるも

眼病手術のうた 五十七年三月補遺

手術まへの湯浴みを終へてゆたかなるころに己が肌着を洗ふ

二時間の手術を終へて運ばるうつそみわれの寝台車ゆく

手術終へわれの静かに両眼を閉じてあるとき握らせしペンよ

筆太の万年筆を握りしめしまらくはわれ両眼を閉ず

三月十一日快晴、末娘の中学卒業式あり

早々に目覚めゐて今日の末の娘の卒業式を臥床に祝ふ

離りゐてありと言へども今日の日の卒業式を床に壽ぐ

眼病の難きものかな幾度と手術繰り返す人と語りて

病院の非常梯子の滑り台銀に光るを眺めて返る

朝明けの空も眺めず病院の窓に降りくる雪をさびしむ

日一日春の陽色となりてゆく街空を左眼覆ひて眺む

病院の八階にありゆらゆらと地震は来りぬ仰臥すわれに

昭和五十九年

無題

去年もはや霜月に蒔く豌豆の芽の大寒に出づるを見るも

風もなく静かなる日となりにけりわが五十九の朝明けの空

雪つもる祠の道を選るさに陽当たるひがし雪解土踏む

仕事辞めむと思ひ悩めど啓蟄の朝駈けてゆくこの身軽けく

丘の家の馬酔木花咲く見上げては花冷ゆる坂下りてゆくも

氷雨あがる丘の舗道のひとすぢの果てにし見ゆる白き山はも

豌豆の白き花終はりすがれたる黄葉を朝の丘畑に見つ

白波の高き飛躍よ岸壁に車を寄せてサーフィンの男達

身に寒き風吹き付くる岸壁の五月となれり吾子と釣する

霧こむる朝丘畑の馬鈴薯の花茎いくつはつかに立てり

桃色に馬鈴薯の花咲き初めて朝丘畑の霧の中に見ゆ

淳夫と仙台港に

五月三日

六月の朝となりたれ栗の木の青き花芽の垂るるを見れば

櫻花散りしく踏みて今朝の朝のおん祠にぞ近づきにけり

散り敷けるうすくれなゐの花びらのおん祠にぞ今朝は額伏す

トマトの實三本ともに成りたるを朝霜の畑に声に出すも

校庭の櫻吹雪をみてしよりなほ八重ざくら蕾みなる紅

鳥追ひの案山子作りて麦藁の赤き帽子をかぶせけるかな

五月二十九日

麦藁の赤き帽子かぶりける案山子に今朝はりボン結べる

豌豆の今年作らず黒土の俣にはつかに菜の花立てり

種蒔き(一)

ともどもにあれとあがつま暇ありて土曜の午後を畑に来れる

相共に休むなかりし土曜日としつきの歳月言へりこの畑に来て

丘谿の畑地あがな購ふこの土に鋤入れにけりわれと吾が妻

荒土あらつちと思へる我のスコップの足踏めば深く入りてもゆくも

爽さはやけき五月はゆかむ丘谿のこの畑土に妻と種蒔く

唐黍とうまきの薄紅色うすべにいろの種置こまきて土かけゆけり何か儉つましく

安らぎを持ちてや今日の午後の日を妻疲つまるればわれの歎なげもつ

蒔まき終へてかへりみすれば畑はたの邊への鳥追とりおひ竿の紐ひもの吹ふかるる

種蒔こまき(二)

丘谿おかたにを拓ひらきて造る畑地はたなれば樹の蔭かげもあり其処そこに坐まれる

小さな二畝ふたうね作り二粒の枝豆えんどうの種落おとして蒔まけり

篠竹しのだけの青あおきを切りて挿さしゆけばはや小さな豆畑まめはたけ囲かこふ

二畝の枝豆の畑竹はたけたけ囲かこひ結びし紐ひもの風かぜに吹ふかるる

街路樹

朝あさな夕ゆふな華はなやぐ街まちをゆきかへるわれに街路樹まちろじゆの移うつろひがあり

蕾つぼみなる青あおき膨ふらみ多おほくみせて梢しやうの木きはなや白しろく筒咲つとみく

勤こまめめにぞ急いそぐ我われにも七月の梢しやうの木きこずえ白しろき花見はなみせ

筒咲つとみきの白しろきが中なかの梢しやうの木きの黄きいの花はな芯しんはまきに大きおほく

八月も終おひりならむか街路樹まちろじゆのななかまどの實みの黄きいに色いろづく

七日余り過ぎてし見ればななかまどの實の柿色にはや移ろひぬ

ななかまどの花のつぶらに白けくもなりゆく朝の繁華街ゆく

折々の歌

七月の初めの朝の丘谿に栗の花穂はいよよ白けし

アーケード街の朝や勤めむひとびとの後姿の並びてあるも

幼さの面に残れる乙女らが深刻そうに話合ふ夜汽車では

つばみなる青き膨らみいまだ多き樟の木こずえ僅か筒咲く

茂吉の歌記せし手帳手にとりて乱れごろを鎮めむとせし

降り立てば夕霧深く狭霧かもわが顔を打つ街裏に出づ

下萎への葉を取るときにわれの眼にトマト小さく成りたるものを

八月の朝の日差しに脚上げて金虫仰に死にてゐたるも

三陸海岸と遠野と

淳夫の車で、八月十日、十一日

わが船の大釜崎へ回らせば岩壁は近しはまなすの花

目の前の赤平金剛岩肌を現し給ふ尊くもあるか

おん前の岩場に憩ふうみねこの姿はありて赤平金剛

わが船の山田湾へぞ入らむとす白き航跡日の丸の朱

此処にして笛吹峠遠野への吾が憧るる道下りなむ

笛吹きの時に来るひとびとの鹹ゆき汗われも思はむ

地下暗く博物館をあらしめて遠野物語映写すを見るも

お白さま悲しきまでの物語り娘とわれと見て出でにけり

狼を除けむとしたる馬が鉦鈍き黄金のいろを見せつつ

早池峰の山の行者の印状をうつせみわれの何と思はめや

盆に入りてより後

十日余り猛暑続き雨降れば盆入りとなる栗の毬青し

雷神山古墳を行かず行かして還りみはせりその坂道を

孫二人われは連れきて八月の墓地みて歩く蟲籠を下げて

ちちのみのちちの旨しと食し給ひしわが畑に成る新唐黍を

ちちははに二畝の土地に畑ものを蒔きて作れると妻は告げぬき

暇いとまなくて盆過ぎててより行きにしが母ははが手起たおこす桔梗ききやうを植うえむ

白菜はくさいの種たね蒔まきし窪くぼに新聞紙しんぶんし切りたるを置く雨あめの降ふらねば

白菜はくさいの芽こぼれに水みづ遣やると如ごと雨露うろ積つみて自転車じてんしゃを漕こぐ昨日けふも今日けふも

淳夫じゆんぶと夏なつ休みやすみ十日間じゆっぴつかんを過すごしければ

もぎて来こし柔なき唐黍とうきびいくつも食くひてこの日ひわが子この帰かえりゆきしか

磯浜いそはまの荒磯あらしその護岸ごあん危あやふかる石いしの上うへにも二人ふたりして立ちぬ

浮うき玉たまの遠とほきに早はやく泳およぎ着きき翻ひりくる吾あ子こを目ま守もれり

雨あめの中なかひとりひとりのわれの坂さか駈かけて思おもはるるかなこの十日間じゆっぴつかん

秋あき立ちぬ

とりどりに木き槿むくげ花はな付けこの丘かみの道みちの邊へに咲さく頃ときとはなれり

葛くわ飾かざりの子こが送おくり呉くれしかわはぎの干物かものを嚙かめり夜よの遅おそきに

定じやう禅ぜん寺じ櫻おう並なみ木きの通かよひ路じに葉はは散ちり初はめて秋風あきかぜぞ吹ふく

秋風あきかぜの立たち初はじめにけり定禅寺じやうぜんじけやき並木なみきの木の葉は吹ふかるる

この丘かみの木き槿むくげ花はな付けとりどりのいろ見て歩あり朝あした楽たのしみ

彼岸過ぎて真日照る中や丘谿の荒畑土の石を拾へり

終はりたる葡萄の支へ外しては僅かに残る房を含めり

妻居ねば娘手作る弁当を今朝はわが持つ涙ぐましも

わが門に娘手作る弁当をわれに手渡す涙ぐましも

曼珠沙華咲きてしあるを少女等の自転車を降り摘むが遠見ゆ

去年付けぬさるすべりの花花付けしひと枝剪ると言ふ妻に答へぬ

柏手の両の手合ひて良き音の鳴りたる朝の祠拜む

南向く錦木のはやくれなるの葉の落ち散らふ丘の道邊に

長男淳夫海上自衛隊の職を辞めむとす、急ぎ十一月三日下総の基地を妻と訪ひたればその折々の思ひを詠める

車窓にて

外国の草なりしが忽ちにして蔓延ると言ふ草の名聞けり

その草の名を妻が言ふその草の名の空しかり聞きつつわれは

知らざりし背高泡立草はびこりて下総が野に黄の色つづく

五年を起き伏しにける独り居の部屋をし見れば涙ぐましも

戸口なる名前が木札大きかりその筆跡をふりかへり見つ

下総の葛飾が原の基地に立ちてこの職辞めむ子とぞ相見つ

廣らなる下総基地の飛行機をまた見むことのありと言はめやも

外柵に沿ひて車を走らせし下総基地を離れかゆかむ

下総の葛飾ごほり晩秋の陽に満ち照りぬ汝が行手はや

つぼみもつ赤と白とのサボテンのふたつを駅の路地に求めし

東京の二日の旅の終はりにて慌ただしくも日展を見る

美術館の人混み縫ひて一瞥す日展なりし妻疲るれば

離れゆく汽車に手を振り駆けし子が熱き涙の忘らえぬかも

職を捨てプロバガンダの道に入る悲しけ児らを守らせ給へ

錦木のからくれなゐに染むも見ゆ朝明の丘にかへりきたれり

さくら葉の紅葉もあかき霜月の七日となれり汝と別れて

鉄棒に脚振り上げて数かぞふ吾が言ふ聲の今朝張りのあり

柏手のやはらかき音感じつつ朝祠にぞわれは額伏す

去年よりは樹木の紅葉の鮮やけき年と思ひつつ丘駈けゆけり

南向く錦木のはやくれなるの葉の落ち散らふ丘下りゆく

絶え間なく櫟黄葉の流らふる定禅寺通り並木道ゆく

櫟葉の半ば散りにし木の間より朝の空見ゆこの並木路に

蔓延りし背高泡立草その黄もところどころとなりてみたりき

わが見てし雑草花の黄のいろもはやなくなりて野は冬枯れむ

長男淳夫、最後の休暇となれり 十一月十七日〜二十日

丘畑に影を作りし谿側の高木を倒す子と二人して

蔦からみ宙づりとなる太樹をば妻とし支ふ子が蔦を切る

わが汗の噴き出づるまで倒したる樹の枝を切る帽を投げ捨て

四匹のはげ丁寧に刺し身して皿に盛れるが冷蔵庫にあり

四匹のはげ丁寧に骨抜きて刺し身に造る業も持ちおり

丘の上の祠に通ふ土踏めばはや霜柱崩るる音す

氷雨ひさめふる朝にし別れ駅に出でわが靴紐を直さむとせり

靴紐を結び直せり別れてはみぞれに変わる街に入りゆく

師走に入らむ

つと寄りて今朝張り初めし薄氷女子学生の踏みゆきにけり

菩提樹のおほかた落ちし裸木に青き大葉おほばの幾片いくひら残る

師走にぞ入りにける街に白銀しろがねのツリー飾りの高く掲ぐる

師走にぞ入りにし街の白樫しろがしの青葉濃きなかに伸ぶ若枝わかえかな

繁華街の冬の朝街わがゆけばしまらくは見ぬ鳩の降りくる

大粒のはくうんばくの實かまたの数多吊り下がりがりつつ年暮れむとす

なお残るはくうんばくの灰色の實のいつ落ちてなくなるものか

街路樹のえんじゅの木の実枯れ枯れて束なはに下がれり年暮れむとす

春よりは通ひては見し樟の木の葉先もいまは半ば枯れゆく

繁華街の植木と言ふも樟の木のその移ろひも見たりけるかな

激しくも時雨の雨の向かひ来る丘畑に挿す霜除けの笹

時雨の雨にはたづみして流らふる舗道にわれの自転車のしぶき

紫陽花の花むらさきに梅雨の朝やわれ校庭の門を駈けゆく

思はぬにわれは見たりぬ蒲公英の白き胞子の呆けてあるを

飛びゆきて僅かに残る蒲公英の白き胞子の呆けてあるも

ところどころ馬鈴薯の葉の黄枯れて六月のはや後半となる

吾妻が「呆けたる十年余りの夫をあやし一心に編みつつける妻ありき」の一首 初めて歌らしきもの作れるにより感ありて聞き及びければ

呆けては十年余りなる夫を守りて毛糸一途に編むところ聞け

飯食ひてなお飯求む呆けては十年余りなるその夫かなしけ

人工肛門の身となり呆け厠探すその夫を看護る声の聞ゆる

昭和六十年

いまは亡き坂本行雄君の霊前に捧ぐ

昨五十九年五月三十日死去の報をこの年頭に知るに及んで

人の世はたまゆらなれや去年もゆく春にし過ぎぬ君と知らなく

いまははや詮すべ知らに現身は写真をとりて歎かふものか

若き日の君と寫りし写真をぞ宝のごとくわれは收めき

相も見ず終はる我等が音信に盡せしいのち慙み給へ

みちのくのこの丘畑に豌豆の芽吹くを告げむ君はあらなくに

大寒に芽吹きてありし豌豆の歌さへ告げむ君は居ませず

枯れ下がるはくうんぼくの残り實の灰なるいろを見れば寂しも

冬街のはくうんぼくの枯れ枯れの残り實見ればわれは寂しえ

偶感

一枚の便箋なれど子が文字の丁寧なるによりわれは安らぐ

立春のひかりとなれる朝街に遊び玉ひとつ銀に転がる

たまきはる命に對ふ願ひ持ちゆきゆく兒らをなにか嘆かむ

身は既に私事を離れける兒らとし思はば何か嘆かむ

去年の秋別れしからに帰り来ずなりにし子ろは如何にか寝らむ

有明のまどかなる月耀ふを久しくも見ず立春となる

朝霜のひとつところ白し校庭の砂場のうへの波打つところ

三月の五日となりて土弛む校庭の朝や児の年数ふ

断食を終へたりと言ふ子の電話七キロ瘦せしと告ぐる声聞こむ

朝街の街路樹の根に寄せ植ゑすさざんかのあかの眼に新しき

三月の彼岸となればわが庭の連翹のつぼみ黄に膨らむ

つぼみなる木蓮のしろ朝霧の込むるがなかにはつかに見ゆる

丘の邊のうら若草の朝露に足結ひを濡らす春となりあつ

五月二十三日は母が命日なれば

ははそはのはは逝き給ふ輝ける五月の朝のその日思ほゆ

仏壇の小手毬の花整ひて見ゆるも母が命日なれば

輝ける五月の朝の停車場に小手毬のうた手帖に記す

小手毬の歌ひとつ書きてははそはのはのいのちに思ひ至れる

幼きもの等

雑草を抜きにし畑に赤味さす小さなトマトひとつを食めり

無花果を畑の北邊に吾が植えて今朝の朝けは水遣りにけり

帰り来ずなりて今年の梅雨明けむ細面の似る若き等を見つ

下総のくりに求めしサボテンの紅白の対あかが残れる

幾度か枯れむとしては息衝けるこのサボテンの花付けしあはれさ

近寄れば呆けし花の茎が根に青毬生るる幼きものよ

呆けては終はる花にも栗毬のふたつ並びて幼きが見ゆ

朝駈けしわれの戻れる小庭邊に鉄砲百合の葉先のひかり

細面の似る子を見れば七月の梅雨の朝の涙ぐましも

栗の花白の呆けし近寄ればはや小さな毬は生れあつ

過ぎ交ひの駅のホームに立てる兒が細き面輪の相似つるかも

わが歌を念じるとき手帖なる万葉の歌けさは詠まざけり

秋の雨ふる

秋雨となりて降り続くこの丘の朝の舗道を蝸牛ゆく

草叢にかたつむり遣らず行きたるが僅かにわれに悔ひのごときもの

生ひ茂る草抜き終へて朝畑の土は新し秋雨のなか

丘下のわれの畑を木樅咲く丘の上より傘さして見つ

木樅咲きほのむらさきの花付けぬその花にしも秋の雨ふる

さるすべりの終はれる花の枝折ればはや秋雨に手濡れけるかも

おん祠 秋風ぞ吹く

桜葉の朽ち葉散り敷く祠なる御手洗石のみづ澄みにけり

ひと片の桜黄葉のいまだ浮ぶ御手洗石のみづ澄みにけり

ひと片の黄葉の雨に揺れもゐて御手洗石のみづ澄みにけり

秋雨のあがれば朝日わが頬にやはらかき朝となりにけるかも

秋風の吹き渡りくる丘のうへの祠み前に立ちにけるかも

おん祠御手洗石のみづ澄みて底ひに朽ち葉沈めるが見ゆ

丘のうへの祠に祈り歩を移す西の斜面に秋風のくる

西の方遙けきろかも山竝の彼方よりして秋風ぞ吹く

二十日余り過ぎてあらんか物言ひし人の死にせし門あけて聞く

茂吉記念館を妻と尋ねて

十一月九日

幾年をここに持ちてありけるが思ひ立ちて来ぬ茂吉記念館

上ノ山の茂吉記念館ここにぞ何時の頃よりわれは思ひし

さんさんと秋のひかりのふり灑ぐ上ノ山の駅に降り立ちにけり

上ノ山の駅に降り立ち朝飯に太き蕎麦食ふあれとあがつま

紅葉する茂吉記念館おとなひてその胸像にわれは近づく

逆光にくろぐろとして浮かびたる茂吉が胸像の顔は老けるし

逆光に茂吉が胸像の暗くしてやや老けたりし顔を眺むる

自らの思ひに成れるささやけき童馬山房みればたのしき

二間なる童馬山房の一間にて「作歌四十年」綴り給へり

この上もなき秋の陽のふり瀧ぐ上ノ山の一日ひとひに邂あひにけり

その昔白き兔の吊るされし上ノ山の町と思ひてゆけり

上ノ山の町朝ゆきてそのかみの茂吉が思ひ俣むとせり

紅葉すでに赤きは散りて寂しくもなれるやまがたあがた山みつ

上ノ山の高きに倚よりて真向まむかへる蔵王の山を妻とわが見つ

竝なみよろふ蔵王の山の移ろひを上ノ山にし暫し眺むる

朝な夕な起き伏す四方よもの山竝やまなみに向ひてあれば歌成るらむか

梧竹ごちくにぞ就きたる君が長峰の太き筆みつその黒き秀ほも

梧竹の書に傾倒す茂吉が筆の竹の太いさ

肉太く高野山のうた書かれたる色紙しきしをいまは惜しみてありき

無造作に茂吉記念館観終へたりあまりにわれに親しきがため

かへるさにふりかへりたる胸像の片辺かたへのもみじ赤かりしかな

わが茂吉ふるさとどころ指さして妻にし言へり乗合の中

紺の訓練帽

長男淳夫、海上自衛隊下総航空工作所を退職してより略一年が経過したが、送り返せし荷の中に紺の訓練帽ありてときに被れば

航空の隊に作りしビロードの紺の訓練帽置きてゆきたり

ビロードの紺の訓練帽置きゆきていつの日かへる子と言はなくて

志^{こころざし} 違^{ちが}ひしままに去^いにし子が紺の訓練帽のビロードはかなし

己が名を帽のうしろに刺繡せし紺の帽子をとればさぶしも

ローマ字に帽のうしろに刺繡せし金^{きん}糸^{いと}の糸のいろのさびしさ

丘の上の祠に脱ぎし帽を持ちてまた還^{かへ}るなき児らをかなしむ

祠にぞ二人並びて祈りたる丈高き背のいまに思ほゆ

わが被^{かぶ}る訓練帽の顎^{あご}紐^{ひも}を風吹くときにわれは掛けあつ

天^{てん}鷲^{じゆ}絨^{じゆ}の紺の訓練帽の大きくて風強き日は顎紐を掛く

さざんかの花の散り敷く庭辺にひとりし立てりこころ虚^{むな}しく

十二月初旬となる

鍋物の湯気立つうへを回りたる小さき蠅の三度とは来ず

言葉覺ゆ女童ふたりかはるがはるわれに向ひて話かけくる

土湿る祠路を来て片寄れる桜朽葉のいろの深しも

夜の雨に洗はれにけむ祠路の桜朽葉の濡るるいろ深し

丘谿にかへりみすれば熊笹にあたる朝日の眼には眩し

冬枯るる丘谿疎林下生ふる熊笹に射す陽のひかりかも

冬枯れむ林は広く下生ふる熊笹のみどり満ちわたる陽よ

われ職を辞めむとして

暗きよりわれ起き出でて朝飼啜りてゆけど空しかりける

夜遅くときに朝早く勤しが思ひ違へば詮すべもなし

勤しみて日々の弁当作り呉し妻にこの職辞めむこと言ひ得ず

この職に遂に耐えざりいざ去りてわが改まるいのちに燃えむ

朝まだきわれの歩みに伴ひてきらめきわたる霜の結晶

昭和六十一年

末娘勤め始めければ

末の娘に頼まれてありし記事の載る週刊誌遅き朝の駅に買ふ

この頃は炬燵に入れば横臥して眠る娘を見つ疲るるならむ

十月余り過ぎて年明けしころほひを吾娘の疲れて炬燵に眠る

臃ろ陽の黄なるひかりひむがしに降りしきりくる雪を映せり

きさらぎころ

きさらぎの寒きこのよひ花習ふ妻が帰りの遅きを思ふ

花習ふ妻が帰りの遅き夜をストーブに掛けし煮物の音す

きさらぎの凍る土より埋め置きし大根を掘る堅きその土

きさらぎの凍る土より起したる大根の根の細き毛根

雷神山古墳 二月九日

雷神山古墳の整地終はりしと言ひ出でしより幾日か経つる

整地終はる古墳のことを言ひ出でし妻と来りぬこの丘原に

きさらぎの昼のひかりのぬくもりに古墳の丘の枯芝を踏む

乾ききるきさらぎころの枯芝を踏みてゐたりきあれとあがつま

紺青こんじょうの平らけき石組み敷くながくつづける古墳をめぐる

順路には鉄平石の石畳組み敷かれたるその石を踏む

きさらぎの昼のひかりは差しながら円き古墳に人影もなし

きさらぎの昼のひかりのぬくもりを古墳の丘に感じつつをり

きさらぎの昼のひかりのほのぬくむまろき古墳のみなみに出づる

めぐりきて円まるき古墳のみなみには陽のあたるところひと寝転ねころべり

めぐりきてまろき古墳のみんなみに人の寝転び陽を浴あみゐたり

二つ三つ平割石ひらわりいしを組み敷きて一段となすきざはし上る

土削り直ただに平割石組みてはやも成りたるきざはしならん

上のぼりゆく石のきざはし紺青こんじょうの色艶持いっくてば美しみ見る

雷神山古墳のうへに白銀しろがねの海みえわたるきさらぎの陽よ

雷神山古墳のうへにきさらぎの真日まひ受けてみゆ白銀しろがねの海

きさらぎのあしたのひかりあまねくてうみこそみゆれしろがねのいろ

陽を受けて地平線はやしろがねの海となりたり古墳に立てば

雷神山古墳のうへは寂さびしかり小さき祠と三つ猿の碑と

三つ猿の見ざる言はざる聞かざるの円まろき石碑に銘は無かりし

地震なみにより祠ほころでんがい天蓋落ちてありし日も思ひ出づ古墳のうへに

雷神山古墳のうへの小さな祠とびらの扉雷神を彫る

幾程いくほどもなき古墳のうへの平ならはや数十坪をひとめぐりせり

春されば如何いかにか古墳よからんと言ふをうべな諾くだひ下りてゆけり

雛飾る子よ

吾娘あこははや寒き座敷にお嫁にぞゆく希ねがひもち雛を飾れり

お嫁にぞゆくねがひ持ち吾娘あこははや寒き座敷に雛を飾れり

飾り付け終りて今宵惚れ惚れと七段の雛みてゐる吾娘あこは

七段の雛人形に見入りたる今宵の吾娘あこは涙ぐましも

七段の雛人形を飾りたる寒き座敷の吾子は愛しき

この春は二十歳ならむかさびしみて父なるわれの目守りてありし
この春は二十歳ならむか雛飾る子をし見つつもさびしかりけり

折々のうた

雛祭る日とはなりたれ女童にわれ桜餅置きてゆきたり

風呂の水差しそうときにたらちねの母を思へり風呂好み給ひし

湯舟には曲らぬ右の脚上げて入り給ひける母をしぞ思ふ

門出づる朝はまだきの中空に朧ろの月の黄なる明かり

駅近くわが歩み来てかへりみる朧ろの月の消えゆくものを

はかなきは移ろひにありかへりみる月はもすでに白くなりゆく

丘谿に春さりくれば天つ日のひかりに松葉淡雪ながる

校庭のプールの柵の金網に融けし淡雪玉に光れる

バスを降り駆け下りくる園児らが足音は高し坂ふりかへる

きさらぎのひるのひかりは差しながら古墳の丘よあれとあがつま

わが足の萎えに気付けりひと月を朝駈くること休みるたれば

休日のため休みに出し娘が帰りて喉の嗽をしたり

街ゆけど手帖をとりて歌つけぬ「写生、写生」とゆかねばならず

妻のたまたま「誰もみて今を盛りの桜花小さき公園静かなりけり」と詠みたるをみて興あれ
ばわれも真似歌つくれる。

夕ぐるる坂をのぼりてわが帰るこの少園のさくら盛れり

静かなる夕ぐれどきを帰り来てこの少園のさくら仰げり

誰が見むかこの少園のさくらばな盛りしままに黄昏んとす

上京の日に 四月十八日

「こすごう」の上り勾配にかかるところ村落の木々白き花付け

「ふくしま」の駅に降り立ち乗り継ぎの朝のホームに氷菓子買ふ

二年はたちまち過ぎぬ栗の花かの沿線に白かりしことも

わが家の屋根葺き終へし赤錆の色をし見ればこころ楽しも

梅雨の間の風

梅雨の間を丘畑に来て休みおれば眼下の樹々風吹きわたる

雑木林高き梢のみどり葉を蹴し吹く梅雨の間の風

眼下の雑木林を梅雨の間の風は吹きをり葉裏返して

風吹けば葉裏返して眼下の雑木林の浅きみどりよ

木斛の葉の艶やかに梅雨の間の夕べを妻とわが愛づるかな

栗の花穂

しろじろと咲きてありたる栗の花たちまち落ちぬ土のうへはや

しろじろと咲きてありたる栗の花梅雨明け待たず落ちてあるかな

梅雨に濡れ谿の縁邊に落ちてある栗の花穂の茶のいろはさびし

丘谿の縁の辺に落つ栗の花ひと穂のいろの茶をさびしみぬ

花穂落ちし付け根に結ぶ栗毬の小さきがなべて二つづつ見ゆ

七月の半ばを過ぎて丘谿の栗の花穂はおほかた落ちぬ

コスモスの苗

丘の上の小園にして作られし花壇のなかのコスモスの苗

コスモスのやや高き苗植ゑられし丘の花壇に梅雨の雨降る

幾つかの草花植ゑぬ花壇にてコスモスの苗高くも見ゆる

コスモスの花の蕾の小さな丘の小園の八月の朝

丘の上の松の木立の影させば身に涼しかる八月の風

木槿むくげ咲く丘をし行けばわが庭に白く花咲く木槿を欲るも

晴蛉あきつのうた

夏深し夕べとなればわが家の延ぶる電線に並ぶ晴蛉あきつは

わが家の電線づた伝ひに並びたる晴蛉に射すや夕べの明あかり

傾きし陽にいま並ぶ晴蛉はやひとつを残し無くなりてあり

このいまの時は過ぎなむ夕ぐるる電線にはや晴蛉戻らず

陽の落つる早しとみれば電線の晴蛉のいまは無くなりてあり

陽の落ちしあと夕ぐるる電線に晴蛉のひとつ戻りてゐたり

蟬落つ

祠路ほくらじの九月初めの朝ゆけばわが足許あしもとに蟬の落ち来る

翅はね擦すりて鳴き鳴く蟬のしまらくはわが足許あしもとに転まろびてゐたり

萩の花咲く

ひかりなす露いちめん萩の花まるけく撓たわみ咲き初そめにけり

雨あめ後の朝露あつゆ重おもみ撓たわみては萩の花はも咲き初そめにけり

薄すすきのうた

仲秋の名月なれば 九月十八日

丈たけ高すすきき薄すすきの赤穂鎌刈りて持ちて来きたりて大瓶おほがめに挿す

鎌刈りし薄赤穂を束ねては大瓶に挿す丈高すすきき儘まま

丈高すすきき薄の赤穂刈り取りて瓶に挿しければ傾かたきにけり

丈高すすきき薄赤穂を挿しけるに丸瓶のみづ重たかりけり

すすき挿す大き丸瓶抱へては妻は縁側に運びけるかな

傾かたきしすすきを束ね真直ますぐにぞ大瓶に挿す立てる長さよ

丈高き薄赤穂を束ねては真直ぐに挿せり穂のゆたかさよ

豊かなる赤穂の垂りを挿してよりわれは見上げつ茎ととのふる

帰り来し娘の月出るを言ひしかばすなはち出でて妻は拝む

月隠るる儘にしあるをわが妻の拝む月はたまゆらなれや

瓶に挿す芒赤穂を朝みればはや白毛立つ穂のかなしさよ

一日経てすすきの赤穂茎切りて短きをわが丸瓶に挿す

「菅生」オートバイレース場にて

降り立てば高きに聞こゆオートバイのエンジンの音轟々として

高きより轟々として興りくるエンジンの音にわれは兀ぶる

少年のごときわが胸の高鳴りを密かに覚ゆ轟音聞ゆ

山間のコースを巡る何分と何秒の数字由々しきものか

くるま倒しカーブを回るときに擦る膝当ての見ゆ擦り切るらんか

くるま倒しカーブを回るときに見ゆ膝当てのはや地を擦るらしも

立て直し直線に入る若者ののめり込む背のはやも小さし

此処つどに集つどふ若者とまたちが時ときの間の燃もゆるいのちを疑うたがふべしや

「マシン」なる言葉用もちゐる拡声器若わかき女の声は明るき

くるま呼よぶに「マシン」なる語を使つかひたる不思議ふしぎなる響ひびわれに良よかりき

丘畑かきにて

わが畑かきの鳥追とりおひさお竿さおの紐ゆ古よりて霜月しもつきの風かぜに吹ふかれつつあり

照ありてくる霜月しもつき半なかば真昼まひる陽ひに大根だいこんを抜ひく丘畑かきにわれは

霜月の半なかばとなれる昼日ひるひ差し浴あびつつぞ畑かきに大根だいこんを抜ひく

隠元豆いんげんまめ

夕暮ゆふぐるる庭にわに座まりていんげんの粒つぶの白しろきを殻からより剥むけり

親指おやゆびの爪つめの間の痛いたけれど殻から剥むき終はへんと勢いきほ出してをり

箆へらに溜たままりし隠元豆いんげんまめの白しろき粒つぶ夕暮ゆふぐるる庭にわに見みてゐるわれは

いんげんの殻からを束たばねし荒縄あらいなを持もてば軽かろしも庭隅にわぐみに置く

来こん年もいんげん豆まめの種たね蒔まかむひとり思おもへり暮くれれ果はてし庭にわに

足早にわれの歩める後より妻訥々と駆けて来れる

昭和六十二年

丘の祠

彫り深き湯殿山の碑新しく傍辺に沿へり丘の祠に

丘の上の祠み堂の中にして汝が笑む顔を今朝も見てゐし

朝なきな丘の祠に駈けゆきて笑みてし遠き日の貌も見む

小さな祠と云へど在ます神還り来ぬ兒を守らせ給へ

雪吹雪く丘の祠にわれは来てこの元旦の朝を祈れり

丘原

冬枯るる丘原の草踏みながら下りて上る道を選びぬ

駆け足の息整へて丘原の西の朱きに向はむとせり

きさらぎに入らんとすらむこの朝明やうやく和む日のひかりはも

きさらぎに入りて夕暮るる西明り四日月かよ光りを増せり

天つ日はわづかに西を射しながら低山竝の尾根あかるけき

足早にわれの歩める後より妻訥々と駆けて来れる

昭和六十二年

丘の祠

彫り深き湯殿山の碑新しく傍辺に沿へり丘の祠に

丘の上の祠み堂の中にして汝が笑む顔を今朝も見てゐし

朝なさな丘の祠に駆けゆきて笑みてし遠き日の貌も見む

小さな祠と云へど在ます神還り来ぬ兒を守らせ給へ

雪吹雪く丘の祠にわれは来てこの元旦の朝を祈れり

丘原

冬枯るる丘原の草踏みながら下りて上る道を選びぬ

駆け足の息整へて丘原の西の朱きに向はむとせり

きさらぎに入らんとすらむこの朝明やうやく和む日のひかりはも

きさらぎに入りて夕暮るる西明り四日月かよ光りを増せり

天つ日はわづかに西を射しながら低山竝の尾根あかるけき

働きて疲れし妻の早く寝ぬる軒の間こゆ隣室にして

丘の祠 その二

御祠ひだり傍辺の山神に捧げられたる供物の数々

山神に供へられたる七品を口に誦へてわれは居たりき

畑物の供物のなかに小魚の干物は銀に輝きにけり

改めて数へ奉れば山神の供物の品は十品にてありき

お神酒、米、胡桃、胡瓜、大根、人参、馬鈴薯、バナナ、林檎、甘藷なり

山神に供へ祭れる品のうちバナナの皮は黒くなりたり

今朝の朝明け数へ奉る十品なる供物のうちに小魚はなし

犬猫に食はれしならむ小魚の干物の供物無くなりてあり

朝祠供へられたる大根の後方を雪は覆ひてみたり

湯殿山の大き三文字の彫りのなか吹きてし雪は白く残れり

「あさつき」と云ふを食ひおり夕べにてこの啓蟄のひと日を思ふ

啓蟄のひと日を陽照り風吹けばわが干す蒲団厚く膨らむ

後^{しり}太き大根にてもありたれど三月^{みつぎ}を経れば萎むその皺

御^{おん}祠^{ひら}萎みて深^{しほ}き皺^{しわ}となる大根の尻^{しつ}つくづく^とと見る

おん祠^{おんひら}供えられたる大根の萎^まみし儘^{まま}に残^{たふと}る尊^{たふと}さ

湯^{たぎ}の滾^{たぎ}る音^ねこそすなれ厨^{くりや}にて児^こを待^{まち}つわれは風邪^{かぜ}を引きつ

児^この便^{べん}り持^{もち}ち来^{きた}りては厨^{くりや}邊^へに再^{また}びわれの読^よまんとはせり

東芝クレジットを退職す 三月三十一日付

踏^{たぎ}切^ぎの霜^{しも}の白^{しろ}きを渡^{わた}りつつわれの早^{はや}出^でも終^はらむとする

踏^{たぎ}切^ぎの枕^{まくら}木^ぎに置^おく朝^あ霜^{しも}の白^{しろ}きを踏^ふめりこの早^{はや}出^ではや

早^{はや}出^でなる一^{いっ}番^{ぱん}列^{れつ}車^{しや}の窓^{まど}邊^へには雛^{ひいな}月^{づき}終^はる天^{あま}つ日^ひ明^あるし

三月^{さん}二十^{にじゅう}七日^{にち}送^{おく}別^{べつ}の宴^{えん}中^{ちゆう}座^ざして巷^{ちやう}にぞ見^みる赤^{あか}き月^{づき}かな

巷^{ちやう}ゆく車^{しや}のなかに満^{まん}月^{げつ}の低^ひく赤^{あか}しも何^{なに}をか言^いはむ 此^この退^{たい}職^{しやく}のうた補^ほ遺^いす

むらさきの木蓮のつぼみ群立つを今朝は吾が見つ僅かなる思ひ
わづかなる思ひはわれに残りゐて今朝はも見つるもくれんの花

この丘の桜並木の太樹々に若葉目立ちて花咲きにけり

丘原の草土踏みて駆け下るわが足窪あしくぼに触るるその土

凹凸おうちとつの土踏みながら駆けゆかむ原始なるものいまこそ恋はめ

丘原の凹凸の土踏みゆくは舗道ゆくところもち良し

登り坂耐えて駆け上がるときにしてわれ息切るるなきを念じぬ

ストーブに熱き湯沸かし一杯の朝の珈琲飲むこと覚ゆ

一杯の朝の珈琲飲むこともわれは覚えきその甘味さへ

珍しく紅べにの斑ある水仙の黄大輪きだいりんの花開きけり

水仙の青きみどりの葉茎立つその直すくなるをわれは好めり

水仙の青きみどりの茎立つも花によりてぞ太たかさ違へり

去年こぞの秋われの求めし球根の三つ四つのうち二つが咲きぬ

満開の桜大枝を曲げながら大風わたる丘の祠路

動物園にて

ポロポロの駝鳥の詩句は消えずありて動物園の駝鳥を見たり

ポロポロの駝鳥の詩句は消えずありて飛ばざると云ふこの鳥みたり

動物園の屑籠のゴミ集め歩く男女の作業員見てをり

入れ袋、帚と持ちて歩み寄り屑籠倒し忽ち入れにき

初老なる男女の作業員の目の配りわれは見たりき

屑籠の在り場所をしも確かむるその面付きを良しと思へり

終はりたる空屑籠に暫しして妻が入れたる屑も持ち去る

空となりし大き屑籠置かれては黒き網目の整ふが見ゆ

土投げて横に飛び回る短足のゴリラの尻の堅く締められり

赤きとも赤しと云はむ日本猿の尻の赤きを今日見つるかな

己が自恣身に付きてある動物のかなしきまでの習性も見つ

爬虫類の微動だにせぬ鎮まりを覗き見しては館を出でぬる

動物園の「そめいよしの」の木札ある桜高木に花の開かず

水仙の花

朝の散歩帰れるわれに玄関に妻の挿しおける水仙の花

勤めにぞ出でたる妻が挿しゆける水仙の花あたらしきかな

朝のヨーガわれは為しつつ水仙の歌二つほど作りてゐたり

口長き銅の一輪挿しにして生けたる水仙ふたび見るも

みどり葉の葉立ちすらりと伸び切りて生けし水仙の花に驚く

雨の降らねば

桜咲く校庭の土いまみればひび割れており雨降らなくに

校庭の土ひび割れてゐたりけり雨降らずして幾日か経ぬる

葱苗ねぎなえの消えゆくがありこの朝を曇りてあれど雨は降らなくに

葱苗の茎の出でたる直すとて手をやればさらさらに土ぞ乾ける

大風に刈萱かりかやの束飛ばされしを宝のごとく元に戻せり

昼過ぎより丘の上なる学校に水汲みにゆく如雨露じょうろを持ちて

桜花いろ濃くなれり散りゆかむいま時の間のいろとはみゆれ

白雲

貧しかる日々は過ぎしか白雲しろくもの浮きゆくすがたかくも良けん

この夕べ白雲浮きてゆきゆくをこころたのしくわれは仰ぎし

白雲かたちの貌よくなれるころほひか花冷えの道もどりてくれば

卯月はやなかばを過ぎて漸くに白雲のかたちわれに還かへり来く

ひさびさにわれに歌あり夜に入りて湯上がりからだ拭ひつつ思ふ

夕方はやがの早はや駆けせむとシャツ脱ぎし裸のままのわれ添削す

折々のうた

三月の下旬に植ゑし馬鈴薯の芽の出でて来きぬひと月は短し

ただ一度驟雨ありしのみひと月の近くを降らず土は乾けり

おん祠天蓋に散る花びらに日照ひでりの雨は降りも出づなれ

ひと日降りて晴れたる朝や天蓋の花びらすでに失せにけらずや

頭痛くて帰りし子ろが黒靴の泥を落とせり夜に入りてより

頭痛くて帰れる兎らに汝が明日の誕生日言ふ父なるわれは

卯月はや終らむとして霜降りん予報に急ぎ夜の覆ひす

朝鮮菊の苗を求めて雨となる夕べ玄関に水遣りにけり

朝鮮菊の苗の五つを朝日差すわが縁先のひむがしに出す

おん祠祭り日となりて

立ちてある奉献雷神社おん幟かぜにはためく音のきこゆる

おん祠五月朔日風吹きて幟はためく祭り日にあり

黒々と筆太にして好ましき幟ぞ立てりおん祠ほくらぐち口

白地には墨蹟太く浮き映えて奉献雷神社おん幟立つ

おん祠み前が土の方二間掃き清められぬ御酒を捧げて

子に長き手紙を書きしこの夕べ降り出づる雨の丘を廻れり

茂吉記念館

この朝俄に思ひ立ちて山形上の山の茂吉記念館に出立す 五月十四日

夜を続つぎて雨の音聞こゆ明けぬればすなはち旅のこころとなりぬ

八重桜散り敷く雨の丘下りひさびさにしてわが遠行くか

ご祭礼の赤き幟の立てらくを仰ぎしがはや忽ちに過ぐ

山寺に暫し停まれる車窓にて立ちてある寶珠山立石寺の札

人も無き茂吉記念館にわれは来て出羽が嶽文次郎手形に手合はず

再びをわれは来りて上の山茂吉記念館芝草を踏む

あしひきのやまこがらしの茂吉の碑その筆跡を真似ても写す

逆光に黒かりし顔思ひつつふたたびわれは来りけるかな

ふたたびをわれは来たればつつじ咲き樹々のみどりは雨に濡れぬつ

ふかぶかと雨に濡れたる芝草を踏めば楽しも三つの碑廻る

頬こけし茂吉が像をいま見れば髭白かりしとわれは思へり

頬こけし茂吉の像にしみじみと丸き眼鏡をわが眺むかな

金瓶の金谷堂

金瓶かながめの金谷堂の石積みいしづみにわれは座りて昼飯ひるいひを食す

白樫しらがしの高く繁りて金瓶の小学校の二階小さし

金谷堂み堂のあかり昼ながら灯せるが見ゆ蜘蛛の巣のあと

金谷堂御堂の傍^{わき}辺^へ並びたる石碑^{いしづみ}の数ひとつひとつ見つ

梵字にて彫れるもありて古き石碑^{いし}らの年代読めど半ば判ぜず

御堂^{みどう}にぞ掲げし額の大らけき文字をし見れば梧竹^{ごちく}と思ひき

金谷堂の古跡に建てる石碑にて梧竹筆跡を確かむわれは

おもほえず梧竹なりしをここにして古跡に認めうれしむわれは

金谷堂の許に立ちたる杉大樹十二丈とふ大木思ほゆ

若葉と虻と

若緑なせる若葉の栗の木の高きに揃ふ今朝の朝はや

みどり遅き栗の高木の先枝^{さきえ}にし若葉の揃ふ丘となりゐつ

みどり遅き栗の高木に若葉揃ふ皐月^{きつき}ははやも半ばを過ぎぬ

五月はや半ばを過ぎて上昇す気温の朝は虻^{あぶ}飛べるなり

わが頭上^{ずじょう}二尺のところあぶ飛べり羽音うなりて留^{とど}まるごとし

わが頭上留まるごとく唸^{うな}りゐるあぶの餌^えに付く身の素早さよ

わが頭上うなりを立てて止まれるあぶ襲ふときその身鋭し

襲ひゆき忽ち返る方寸の身の置きどころ定まりてあり

僅か冷ゆる五月十九日朝となり昨日飛びたる虻の来たらず

檳榔の實の飾り玉

妻が台湾の旅にて檳榔の實の飾り玉戴きしによりて詠める歌ありて「檳榔の青い実ゆるる
手提げをば今日も持ちつつ台湾想ひぬ」なれど、いと感慨深ければ

台湾の旅にい行きて妻が得し檳榔の實の飾り玉ふたつ

檳榔の實のかたちせる飾り玉ふたつ青きを手提げに結ぶ

結びたる手提げ飾りのふたつ玉揺るれば鳴りてときに恋ふらく

さやさやに手提げ飾りのふたつ玉おとのするにぞ思ひ出つらむか

檳榔の青き実なせる玉飾り結びし手提げ今日も提げゆく

豌豆の實

朝な朝な僅かながらも実を付くるさやえんどうを摘める慎ましき

ひと日ひと日さやえんどうの實の付けばひと握りづつ畑に採りくる

汁の実となれる豌豆の青々し肌をひそかによるこぶわれは
さくさくと音こそすなれ朝摘める豌豆の実を夕べに食せば

山百合のうすみどりなせる茎のびていよよその葉の高く垂れたり

中澤屋敷を尋ねて 五月三十日

愛島の塩手めでしましおでぎい在より移しける中澤屋敷「ほいと柱」あり

嫁かくしなる柱もあり隠さるる嫁にもつらきこともありなむ

茅葺かやぶきの軒かやぶに厚みある切り口の萱かやをしみたり北面ほくめんにして

水無月のおん祠

茎細き野菊の白き束ねある丘の祠の水無月みなづきのあさ

水無月の雨ふり出づるおん祠馬鈴薯の花われは手向けし

この年も水無月みなづきゆかむ日のあした蟻あまた廻めぐる祠み台を

手向けたる馬鈴薯の花おん祠台上にいまもあり朽ち果てにつつ

七月に入りて幾程いくほどもなき日なり始めて見たり庭に蜻蛉あきつを

この朝明あきけ庭の山百合に来て居たる蜻蛉あきつに輪廻りんね思はざらめや

樽水のダムの入江に鮒釣ると水無月はじめ晴れし日をゆく

へらぶなを初めてわれの釣らんとて樽水ダムの崖道廻る

夜の雨の草葉の露にわがしとど股濡らしつつ断崖下りゆく

うき深く沈みてゆけば持ち上ぐる竿の手応へ言ふべくもなし

樽水のダムの底ひは樹々多し投げたる竿の糸また切らる

忽ちに切られし糸の針結ぶ作業をしては昼となりたり

昼過ぎて投げし竿のうき深く沈み始めてのわがへら鮒を釣る

ふたたびへら鮒を釣りにゆくも

ふたたびをわれは来りていろいろと練り餌配合すれども釣れず

釣り糸のまとも引つ掛かり諦めて水際に寄れる石の崩れし

水際のダムは危ふし足掛けし石たちまちに崩れ落ちゆく

崩れかかる石にズルズル足引かれ危ふくもわれ生ひ木に縋る

沈みゆく石に生ひ木にすがるとき帽と眼鏡を飛ばしてゐたり

長靴の深みに嵌まりゆくを支へ上がりしときに帽子と眼鏡なし

生ひ木にし縫れるわれの帽子飛びて水に浮かべり這ひても上がる

水底を探れどわれの眼鏡なし諦めて眺む彼方砂上にあるも

斜めなる石転がりて落ちゆかむダムの構造も知らずでありし

泥となる長靴と靴下乾してある入江水際の枯木と風と

筒白くふたつ並びて庭に咲く鉄砲百合に夕明かりすも

畑の南瓜

覆ひたる廣葉を上げて覗きければ南瓜其処此処に息づくごとし

漸くに畑仕事の要領もわが覚えつつ年重ねんか

豪雨あり明けたる朝のわが畑の南瓜の花に蜂は潜るも

開きたる南瓜の花の黄は濃しつぎつぎ蜂は潜りてゆくも

南瓜畑黄のいろ濃くも開きたる花が花芯に蜂は潜れり

南瓜花開けるがなかに蜂もぐり間なくもつぎの花に移れり

昨日みてし南瓜畑の花のいろその黄のいろ濃きを忘れず

庭の向日葵

わが庭に自生せるひまわり直径三十センチほどありまことに見事なるものなり

天空に聳ゆるごとく丈高くなりてひまわり花さきにけり

種蒔きしひまわりならず自生せるひまわりにして伸びすさまじき

いま見れば向日葵の花の中どころ茶いろに非ず草いろなすも

ゴッホが画くひまわりの花の最中はや草いろなりし思ひ出つも

見上ぐれば黄のはなびら自在にぞ振れながらに陽を受けりたり

陽の落つるひまわりの花片おとなしくなりてつぶらに並びてゐたり

公園の木槿

この丘の公園にして一本の木槿の花の白く咲き出づ

幾年をこの公園の白木槿花咲けばわれ愛しみてありき

花芯さへ真白き木槿白花の清々しもよ近寄りにけり

咲き出でんむくげの花のつぼみはもほそぼそとして白く尖れり

七月の終はりなる日よ木槿咲きひと日雨ふる夕べとなりぬ

木槿花白きが咲きて群立てるすがたを雨の夕べに見たり

数々の木槿の花のいろをしもわれは思へど白は良けむか

七月の終はりならむ日傘さして木槿の花の白きをもみむ

鈴虫の子を飼ふ 八月一日

鈴虫の子を貰ひ来しボール箱開くれば跳びぬその小さきが

わが開けしボール箱より跳びゆきし小さなる虫は何処なるべし

鈴虫の籠箱買ひてわが妻は貰ひし砂を六分目入るる

ボール箱一夜を置きて鈴虫を妻が買ひ来し籠に入れむとす

ひと夜置きしボール箱より鈴虫の子たちを入るる掃き落とすがに

鈴虫の子達を籠に移すとき忽ち跳べり幾匹が外に

鈴虫の子達は跳べりたまきはるいのちのゆると思はざらめや

幾匹の小さなるいのち拾ひては籠に入るも死するもありき

鈴虫の子を指をもて掴むさえ忽ち死するいのち知るべし

手の甲に運び来りて籠中に落とすをよしと吾妻は言へり

いちど跳べる鈴虫が子のふたたびを跳び敢へず這ふ廊下敷間を

たまきはるいのち短き鈴虫の子たちがひと世あはれみにけり

記念切手「金亀舍利塔」

六通の暑中見舞をながながと書きたる妻が八月朔日

六通と思ひゐたれる暑中見舞よく数ふれば七通にてありき

七通の暑中見舞にわが貼りぬ記念切手「金亀舍利塔」

そのかみに妻が台湾に行きしとき伴ともに行きたる七人と聞く

新しき唐鍬

三つ又の唐鍬ひとつ購あがなひて柄根より水濡らしてゆけり

三つ又の唐鍬ひとつ購ふかあらくきひて深雑草を退治せんとす

柄根より水を濡らして置きにける唐鍬柄根鉄に色づく

柄根より鉄のいろ染む唐鍬にさらに水かけ出でゆかむとす

唐鍬の真白き柄にわが握る手袋の土つけば土色

梅雨明けず八月となるわが畑に荒草取ると唐鋤入るる

新しき唐鋤ふるふわが畑にたちまちに來し驟雨なりける

驟雨來てやうやく汗のふき出づる畑に唐鋤収めんとする

新しき唐鋤なれば雨のなか三つ刃清めつ収めんとする

落ち蟬と桔梗と

走り來しわれの後方に声のありけたたましもよ蟬落ちて転ぶ

ふりかえることもせざりしうつせみのいのちのゆゑともひてかけゆく

孟蘭盆の近づくころや蟬しぐれこの丘谿に深しと云はむ

孟蘭盆の近づく宵や演歌流し西瓜売りするくるまの通る

坂元の祖母が賜へる桔梗の根三年を過ぎて花よく付けり

つぎつぎと桔梗の花の咲き続けば朝な朝なに花殻摘めり

萎みたる桔梗花殻ひとつ摘みてわが朝駆けに出でむとはせり

鈴虫生きぬ

鈴虫を籠に飼ひてより幾日経む白髭長くなりまさりけり

梅雨明けず八月となるわが畑に荒草取ると唐鋏入るる

新しき唐鋏ふるふわが畑にたちまちに來し驟雨なりける

驟雨來てやうやく汗のふき出づる畑に唐鋏収めんとする

新しき唐鋏なれば雨のなか三つ刃清めつ収めんとする

落ち蟬と桔梗と

走り來しわれの後方に声のありけたたましもよ蟬落ちて転ぶ

ふりかえることもせざりしうつせみのいのちのゆゑともひてかけゆく

孟蘭盆の近づくころや蟬しぐれこの丘谿に深しと云はむ

孟蘭盆の近づく宵や演歌流し西瓜売りするくるまの通る

坂元の祖母が賜へる桔梗の根三年を過ぎて花よく付けり

つきつきと桔梗の花の咲き続けば朝な朝なに花殻摘めり

萎みたる桔梗花殻ひとつ摘みてわが朝駆けに出でむとはせり

鈴虫生きぬ

鈴虫を籠に飼ひてより幾日経む白髭長くなりまさりけり